

気の毒そうな顔して、「You missed the plane!」。そんなはずはないと言って、私の時計を見せるが、相手はカウンターに掛かっている時計を示し、どうしようもないから Western Airline の事務所へ行って相談しろとほんとうに気の毒そうな顔をしてきて言うだけであった。(なにせ Jackson への便はこれしかないのであるから。) こうなってはなり振り構っておれない。明日の朝の 3 番目に発表しなければならぬのだから、どうしても本日中に Jackson へ行かなければならないという命題を解決すべく事務所の兄さんに頼み込んだ。必死になって事情を説明する我々の状況を悟って、相手も真剣になって、キーボードを叩き、3人で得た Best な方法は、5 時間後の夕方 6 時 30 分発の便で Idaho Falls へ行き、160km をレンタカーでロッキー山脈の谷間を真夜中運転することであった。(我々は車を運転するつもりはなく、国際免許証を持っていなかったが、たまたま中村先生が持っておられた日本の免許証で乗れることがわかった。) ホテルへは長距離電話で必ず行くからと部屋の予約と事情を説明し、Idaho Falls に着いた頃はすっかり日は落ちていた。暗い中を初めて外車を運転するが、エレクトロニクス化した高級車の運転の仕方と町の内からメインストリートへ出る方向からしてまず迷ったが、幸いにして隣のレンタカーを借りに来た親切な兄さんがいて、何とか夜の 11 時過ぎにホテルへたどり着けた。その間、真暗闇のロッキー谷間のドライブではほとんど車に合わなかった。翌朝、荷物が無いので、ヒゲも剃らず会場へ行ったが、昨日の事件ですっかりアメリカ生活に自信が付き、我ながら落着いて発表できたと思っている。発表後お世辞でも外人がほめてくれたので、気分を良くしようやく飛行場へ荷物を取りに行き、後は楽しいアメリカの日々を過ごすことができた。

10月9日から5日間、今年2ヶ月間研究室へ来ていたプエブラ自治大学の陽気なメキシカンのペドロサとモンロイを訪問すべく、メキシコへ移動した。紙面の都合で詳細に報告できないのが残念であるが私のメキシコに対する認識のなさを感じさせられた。ペドロサはメキシコを知るため1ヶ月いろと言っていたが、メキシコシティ到着と同時に飛行場でメキシコ特産だと言って皿にいっぱい盛ったフルーツをまず食べさせ、自動車で行動を開始した。夜中の1時過ぎまでメキシコシティ内をあちこちと回ったが短期間ではこのようなスケジュールになるのであろう。合衆国にないメキシコの歴史を見てくれという彼らの気持ちが良く伝わってきた。しかしその日は

本当に疲れた。

翌日はメキシコシティから東へ約130km行った彼らの大学があるプエブラへ行ったが、その途中に有名なティオティワカンの遺跡へ寄った。エジプトとは違う作りのピラミッドである。それからプエブラの近くの Cholula のピラミッドもまたすごいものである。すべてのピラミッドは何回かに渡ってだんだんと大きく作ってあり、この Cholula も7層にもなっていて、低面積はエジプトのもの以上だそうである。しかし驚いたことには、スペインの征服者は破壊しきれなくて、全体を土で覆い、山のようにして、その頂上へ征服者のシンボルとして教会を建てていることで、この国の歴史をよく象徴している。それについてペドロサは現代でも同じことが起っているよと、あっさり答えていた。彼らの血には征服者と被征服者の両方が複雑に混ざり、新しいメキシコを築いている点が、合衆国と大きく異なるところと思える。歴史のある古い立派な建物が多く(その都度ペドロサは“antique”を連発する。)、生活で必要な物は(例えば、メトロポリタンという新しい地下鉄はどこまで乗っても1円ぐらいらしい。)非常に安く、また国立人類学博物館のように立派すぎると思える新しい建物があるなかで、工業に関しては、特に今回見て回った半導体関係のレベルは今始ったばかりという段階である。プエブラ自治大学(16世紀から始まっているが、現学長の39才という若さには驚いた。)はメキシコでも2番目ぐらいの大学だそうで、6年前に作られた半導体研究所(ここの所長がペドロサ33才、スタッフ約40人の平均年齢30才以下。)はこの国のこの分野をささえている重要な1つである。(他に2つしか関係機関がない。)装置はすべて大学で作っていて、(しかし外観は市販品に見える。)原料の精製から行っている。国の事情のため高価な外国製品は購入できず、といって国内には作っているところがないから、必然的にこのようになるようである。日本からペドロサが帰国するときプリズムを購入して帰ったが、それを使って顕微鏡をも自分達で組み立てているところであった。気の毒な状態である。しかしペドロサ、モンロイを初めとして若い研究員(女性も多い)は何とかこの分野を立ち上げようと頑張っている。来年にもまた若いスタッフ2名を本学へ行かせたいと言って、学長、事務局長らに我々を会わせ、張り切っていた。将来、彼らの研究所からメキシコを背負っていく人が多く出てくるように感じ、また願っている。